

第二の誕生

—「出生性」についての研究ノート—

The Second Birth: Research Notes on“Natality”

藤井 奈津子

FUJII Natsuko

要旨

オランダの教育学者ランゲフェルトは、来日講演において、強制収容所に送られたあるユダヤ人少女の絶望と回復のエピソードを語っている。本研究ノートでは、ランゲフェルトが語るこのユダヤ人少女のエピソードが含意するものを、ユダヤ人思想家アーレントの「出生性(Natality)」の概念から読み解く。アーレントによると出生とは始まりである。さらに世界のうちに生まれることが第一の誕生(始まり)であるとするならば、世界のうちで行為することは第二の誕生(始まり)のごときものである。われわれ行為する人間は、自らの責任において世界に関わってゆくこと、自らのイニシアティブにもとづいて何か新しいことを始めることによって、われわれがこの世に生まれたという誕生(始まり)の事実に応答している。そして子どもたちにそのことを発見させるべく寄り添い援助することこそが、ランゲフェルトの考える教育者としての使命である。

キーワード：ランゲフェルト、アーレント、出生性、始まり、第二の誕生

1、あるユダヤ人少女のエピソード

子どもの人間学で知られるオランダの教育学者ランゲフェルト(Marutinus Jan Langeveld, 1905 - 1989)は、1960年代にドイツで活発に議論された教育人間学への理論的関心とともに、日本でも注目されるようになった教育学者である。ランゲフェルトは人間学的思考と現象学的方法を取り入れた独自の教育学を確立したが、その基盤は彼が戦前戦後を通して続けてきた教育相談活動にあったと言われる。第二次世界大戦におけるナチスの台頭とユダヤ人の迫害は、オランダの人々にとっても忘れることのできない苛酷な体験であったが、彼の教育学はそのような「人間破壊の悲劇の体験とその悲惨を生き延びた子どもたちへの支援の経験とに基礎づけられた」、また「子どもたちが『人間らしさ』を取り戻す過程に共在するなかで誕生した」[皇 2013:236] 教育学であったのである。1979年に来日した際に京都大学で行われた「おとなであることの意味」と題する講演¹のなかで、彼は次のようなあるユダヤ人少女の絶望と回復のエピソードを語っている。

これから述べるのは、第二次大戦の最後の年(一九四五年)に、ポーランドの農家に隠れていたユダヤ人の一家の話である。この家族はナチスの突撃隊に発見され、父親はその妻と二人の娘の目の前で最も残酷なやり方で殺され、母親と七歳と十一歳になる娘は強制収容所に送られたのであった。この収容所では囚人にはほんのわずかな食物しか与えられなかったが、母親は自分の分をみな二人の娘に与えてしまった。少したって下の娘が死んだ。上の娘がそれから五年後に私に語ったと

ころによると、母親はその後すっかり衰弱してしまって、ずっと地面の上に寝たきりであった。ある日、娘が母親の側に坐っていると、母親はかすかに眼を開いて言った。「私はもうすぐ死ぬでしょう、ヤニナ。でも、おまえとずっと一緒にいられて私は幸福だったよ」と。諸君はその時何が起ったと思われるだろうか。それを聞いた娘は答えたのである。それにしても、この母親の言葉にはたして然るべき答なぞあるのだろうか。だが、この小さな娘は叫んだのである。「お母さん、大きくなったら私も子どもを生む！そして、みんなで幸福になる！」と。

やがて戦争が終わり、娘はあるドイツの私の同僚の家庭にひきとられた。数年たって、彼女は自分では解決できないような精神的葛藤に陥ったため、その同僚から私のところに送られてきた。彼女はその時十六歳であったが、彼女はあの時はたして将来自分と自分の子どもが幸福になると母親に言ったのがよかったのかどうか、疑い始めたのであった。何故なら、彼女が私に言うには、彼女は「あれから世の中についていろんなことをたくさん見てきたので、もう自分たちが間違いなく幸福になれるという確信がもてない」というのである。

そこで、私はとにかく人生をもっと生きてみなければ、彼女が幸福になるか不幸になるかわからないということを、彼女に気づかせようとした。つまり、彼女が将来のことをただ思い患うのではなく、彼女が実際にこれから生き続け、一人の母親の生活を送るようになった時、はじめて彼女は幸福になるはずだからである。しかし、繰返すまでもなく、彼女の幸福は機械的な結果としてではなく、彼女が自分の生活から、また彼女の夫と子どもたちの生活からつくりあげた所産として可能になるのである。

それ故、彼女はあの時、実は母親に「約束」をしたのである。つまり、彼女は自分が生き続けるということ、しかも人生を創造的な課題として積極的に生きてゆくことを約束したのである。自分が実現しなければならなかったのは、実はこの約束だったのだ、と彼女は数日後、私に言った。彼女はそれを果すべく再び努力しようと思った。したがって彼女は前と約束を変えたわけではなかったが、今や十六歳の少女としてそれにもっとおとならしい形を与えたのであった。彼女は、あの時自分が子どもを生むことを一つの課題と考えただけではなく、愛と幸福の一つの形見としても考えていたと言ってよいことを、理解したのである。[ランゲフェルト 1980:62-64]

筆者は今から 20 数年前の大学院生の頃にランゲフェルトの来日講演集を読み、このエピソードに出合った。印象的なエピソードではあったものの、このエピソードを通してランゲフェルトが言わんとしていることが何なのか、当時の筆者にはいまひとつ理解することができなかった。また、筆者自身子どもを生み育てていないという引け目もあっただろう、「大きくなったら私も子どもを生む！そして、みんなで幸福になる！」というユダヤ人少女の言葉、また「子どもを生むこと」と「生きる意味」とを繋げるランゲフェルトの記述に、どこか居心地の悪さを感じていたことも記憶している。ところがここ数年ユダヤ人思想家アーレント(Hannah Arendt, 1906-1975)の著作を読み進めていくなかで彼女の「出生性(nativity)」の概念を知った際、それまで忘れていた上記のエピソードが急に思い出され、筆者はあらためてランゲフェルトの講演集を読み返してみるに至った。すると驚いたことに、以前はよくわからなかったこのエピソードの意味が、突如として明確に浮かび上がってきたのである²。

強制収容所で死にゆく母親と少女が交わした言葉は何を意味していたのだろうか。また後年少女はこの言葉に何を見出したのだろうか。そしてランゲフェルトは少女のエピソードを通してわれわれに何を伝えようとしたのだろうか。以下は、ランゲフェルトの語ったこのユダヤ人少女のエピソードに

ついて、アーレントの「出生性」の概念を手がかりに読み解く研究ノートである。

2、始まりとしての出生

アーレントの出生性の概念は彼女の第二の主著『人間の条件（ドイツ語版書名：活動的生）』において展開されているが、それらを理解するためには、少なくとも彼女の第一の主著『全体主義の起源』の最終部分の考察を踏まえておかなければならないだろう。アーレントはそこで、強制収容所で人間の本性が奪われていく状況を、「法的人格の破壊」「道徳的人格の破壊」「個性の破壊」の三段階の過程において説明している。

アーレントによると強制収容所へ送られる人間たちはまず法的人格を破壊される。彼らは法の保護を失った存在、法的権利を失った存在となり、法の外にいるがゆえに彼らの身に起こることはもはや誰にとっても問題にならない。彼らは衣食住を奪われ、名前を奪われ、ついには存在していなかったかのように扱われるのである。つづいて彼らが破壊されるのは道徳的人格である。自分の3人の子どものうち誰を死に追いやるのかを決めるようにナチスに命じられた母親に、もはや善と悪の選択肢はあり得ない。そこにあるのは、この殺人かあの殺人かという解決不能の葛藤と、その後の錯乱状態だけである。

このような法的人格の破壊においておぼえる怒りや道徳的人格の破壊において味わう絶望以上にわれわれを戦慄させるものは、個性の破壊である。「個性の破壊ということは、自発性の——つまり、環境や出来事に対する反応では説明され得ないある新しいものをみずから進んで創始する能力の——抹殺にほかならない」[アーレント 2017:271]。強制収容所での様々な拷問を経験するなかでみずからの意思を表明する能力を剥奪された人間は、死に至るまで唯々諾々と同じ反応を機械的に繰り返す、パブロフの犬と同様にふるまう操り人形となる。ここに強制収容所での人間の非人間化、すなわち生ける屍が完成するのである。

このような凄まじいまでの人間破壊を経験したわれわれに、はたして希望はあるのだろうか。その困難な問いに向き合おうとしたのが、アーレントの第二の主著『人間の条件』であった。そこでは、人間による新たな「始まり」が全体主義克服の鍵であることが示されている。

アーレントは、われわれ人間は何か新しいことを始めるために生まれてきたのだと言う。彼女は、アウグスティヌスの「始まりが存在せんがために人間は創られた」という始まりの原理を、神による人間の始祖アダムの創造ではなく、世界に生まれ出る人間一人ひとりの出生として次のように読み替える。「人間の創造とは、始めるという能力をみずから所有する存在者が、始まるということなのだ。すなわちそれは、始まりの始まりであり、もしくは始めることそれ自体の始まりなのである。人間の創造とともに、始まりという原理が、この世のただなかに出現したのである。[中略]つまり、一個の誰かとして人間が創造されることは、自由が創造されることと一致するということ、これである」[アーレント 2015:220]。人間の誕生とは、唯一無比の人格を備えた新たな人間が、世界に新規参入することである。それは世界のコンステレーション（配置）を変化させることであり、そのつど世界に予測不能性、不確実性、すなわち自由をもたらすことであろう。

だがアーレントによると、「この新しい始まりが世界のうちで本領を發揮しうるのは、当の新人に、何らかの新しい始まりをみずから為す、すなわち行為する、という能力がそなわっているからこそである」[同上 13-14]。つまり、世界のうちに生まれること（＝始まること）が第一の誕生だとするならば、世界のうちで行為すること（＝始めること）は第二の誕生のごときのものである。出生という受動

的な始まりに対して、行為は能動的な始まりである。行為する人間は、自分が誰であるかをそのつどあらわにし、自分という存在が人格として唯一無比であることを自発的に示す。そしてわれわれはこのように、自らの責任において世界に関わってゆくこと、自らのイニシアティブにもとづいて何か新しいことを始めることによって、われわれがこの世に生まれたという「出生＝始まり」の事実に応答するのである。

3、約束と第二の誕生

以上のアーレントの出生性の概念を踏まえて、ふたたびランゲフェルトのユダヤ人少女のエピソードに戻ってみることにしよう。

少女の母親は死にゆく前に、「私はもうすぐ死ぬでしょう、ヤニナ。でも、おまえとずっと一緒にいられて私は幸福だったよ」と少女に語った。強制収容所での恐るべき人間破壊の状況のなかで、最後に母親は少女ヤニナに一筋の光明を見出したのだらう。なぜならヤニナが生まれ、ヤニナを育て、ヤニナと一緒に暮らした日々は、母親にとって「新しい始まり」の連続だったからであり、それは同時に母親みずからの「出生＝始まり」の肯定でもあったからだ。だから母親はこの極限状況で、ヤニナに「幸せだった」と語ったのである。そして、このとき死にゆく母親に「お母さん、大きくなったら私も子どもを生む！そして、みんなで幸福になる！」と叫んだ幼い少女は、無邪気にも母親が語ったことと同じことを返答していたのである。

だが、少女がみずからの言葉の意味を本当に理解するのは後年になってからである。戦争が終わり、ランゲフェルトのもとへ送られてきた少女は、何もかもを失い、生きる意味を喪失していた。そして自分はある時母親にああ言うべきだったのかどうかを疑い始めたのである。しかし、ランゲフェルトとの数日間の対話の後、少女はある時自分は母親に「約束」をしたのだということ、そしてそれは「人生を創造的な課題として積極的に生きてゆくことの約束」だったということに気が付くのである。つまり、少女の「私も子どもを生む！」という言葉は、みずからの責任、みずからのイニシアティブにもとづいて、世界に関わり、新しいことを始めることを意味していた。そしてその意味するところのものに気付いたとき、少女は再生（新生）を遂げたのである。

しかし、世界との遭遇には偶然がつきものであり、思いがけないアクシデントがそこには待ち受けている。アーレントはそのような「予測のつかなさ—またそれとともに、どんな未来の事柄にもまつわるカオス的な不確実性—に対する救済策は、約束を交わし、守るという能力」[同上 310]にあると述べている。アーレントによると、約束とは、予測不能な未知で未到の海域を進んでいく船にとって時折目印となる、ある種の島のようなものである。そしてこのような「不確実な未来のために約束することによってたがいに拘束し合い、未来に備えるということがなかったとすれば、自分自身の自己同一性を持ちこたえることは、われわれには決してできないだろう。われわれは、人間のこころの暗がりに、その曖昧さと矛盾とに、寄る辺なく引き渡され、一人ぼっちの気分の迷宮のなかをさ迷うだけであろう」[同上 311]。だからこそ、母親と交わした少女の言葉は「約束」なのである。少女における母親との約束の想起は、みずからの誕生の事実の肯定であり、それは第二の誕生へと向かわせる道しるべでもある。少女はその約束を「愛と幸福の一つの形見」として繰り返し想起し、そのつど創造的な生を生き、その後、しかるべき時期に子どもを生み、少女の母親と同様、子どもたちの良き教育者となったのである。

ランゲフェルトのエピソードは、人間破壊の悲劇からいかにして「人間らしさ」が回復され得るの

か、その人間回復の過程において大人や教育者は「人間として」どのように振る舞い援助すべきであるのかを示すものである。われわれはパブロフの犬のように同じ反応を機械的に反復する操り人形ではない。アーレントの出生性の概念から見れば、ここで言う人間回復とは、みずからの責任において世界に関わってゆくこと、自らのイニシアティブにもとづいて何か新しいことを始めること、そしてそれによって、われわれがこの世界に生まれたという「出生＝始まり」の事実に応答することである。したがってランゲフェルトは、教育者の根本は「ほかならぬこの子どもが困難から脱け出て、彼自身の人生の創造的な過程に入ってゆくための彼の特殊な自分の道を、いかにしてその子どもに発見させるべく助けることができるか」〔ランゲフェルト 1980:94〕にあると考えたのであった。

そして以上のような、ランゲフェルト - アーレントの「出生＝始まり」の概念から導き出される教育観は、中島みゆきの『誕生』³という曲の一節に見事に表れている。

Remember 生まれた時
だれでも言われた筈
耳をすまして思い出して
最初に聞いた welcome

Remember けれどもしも
思い出せないなら
わたし いつでもあなたに言う
生まれてくれて welcome

誰もが誕生し、この世界へ参入するとき、世界からウェルカムと言われている。なぜなら一人ひとりの誕生はいずれもが世界を革新する新しい始まりであるからである。その出生＝始まりの事実に応答することが、生きることの意味である。しかしその原初の言葉を思い出せないなら、私があなたにウェルカムと言おう、生まれてくれてウェルカム、と——。このように無力で寄るべなき子どもに同行同苦し、その子どもの経験の意味を理解することで、その子どもが「自己 - 創造」するためにどのような援助が必要であり可能であるのかという課題に取り組むこと、これこそがランゲフェルトがユダヤ人少女のエピソードを通してわれわれに伝えたかった（広い意味での）教育者としての使命なのではないだろうか。

◆註

- 1 京都大学における連続公開講演（全5回）のうちの第3回の講演。
- 2 ランゲフェルトの語ったユダヤ人少女のエピソードについては、和田（1980）や西村（2011）が本稿とは異なる視点から考察している。
- 3 中島みゆき『誕生/Maybe』ポニーキャニオン、1992。

◆引用・参考文献

- ・M・J・ランゲフェルト『人間と教育の省察』岡田渥美・和田修二監訳、玉川大学出版部、1974。
- ・M・J・ランゲフェルト『続 人間と教育の省察』岡田渥美・和田修二監訳、玉川大学出版部、1976。
- ・M・J・ランゲフェルト『よるべなき両親—教育と人間の尊厳を求めて』和田修二監訳、玉川大学出版部、1980。
- ・H・アーレント『全体主義の起源〔新版〕』1-3、大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、2017。
- ・H・アーレント『人間の条件』志水速雄、ちくま学芸文庫、1994。
- ・H・アーレント『活動的生』森一郎訳、みすず書房、2015。
- ・和田修二「付録四 ランゲフェルトに人と思想」M・J・ランゲフェルト『よるべなき両親—教育と人間の尊厳を求めて』和田修二監訳、玉川大学出版部、1980。
- ・浜口順子「ランゲフェルト先生追悼に寄せて」『幼児の教育』第89号（9）、フレーベル館、1990。
- ・皇紀夫「臨床教育学からみたランゲフェルト教育学」和田修二・皇紀夫・矢野智司編『ランゲフェルト教育学との対話—「子どもの人間学」への応答』玉川大学出版部、2011。
- ・西村拓生「『子どもが忌避される時代』に教育に踏みとどまるために—ランゲフェルトの『おとなであることの意味』を受け取り直す」和田修二・皇紀夫・矢野智司編『ランゲフェルト教育学との対話—「子どもの人間学」への応答』玉川大学出版部、2011。
- ・森一郎『死と誕生—ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会、2008。
- ・森川輝一『〈始まり〉のアーレント—「出生」の思想の誕生』2010。
- ・川崎修『ハンナ・アーレント』講談社学術文庫、2014。
- ・森川大輔『ハンナ・アーレント—屹立する思考の全貌』ちくま新書、2019。
- ・日本アーレント研究会編『アーレント読本』法政大学出版局、2020。